

一物の見方、考え方— 経営に生かす仏教哲学

青木伸雄

1. まえがき

何故、今、仏教哲学なのかを考えると、最近の物の見方、考え方が主観と客観、主体と客体、わかり易くいうと善と悪という相対的な考え方が増加、単純に結論をだし問題が生じている気がしてならない。

仏教的な物の見方、考え方の基本は二元論 (dualism) に対し一元論 (monism) であり、全てを総合的にみてゆこうとする絶対的な考え方で、対立して物事を考えないことが基本である。

「他思故有我」、それは「他を思い考える故に自分の存在がある」ということである。

最近、多元論 (pluralism) 的な考え方がある。これは、次の如く理解されている。

- 1) 世界が相互に独立な多くの根本的な原理や要素から成り立っていると考える世界観。
- 2) 広義では、ある対象領域について相互に独立な多くの根本的な原理や要素を認める考え方。

我が国の場合は根本的には、神道も仏教も、キリスト教も、イスラム教も認める習合思想の国である。

しかし、一般的な考え方は明治以降からは、合理的、相対的な考え方で物事を二元的に考えていく、合理的で実証的な先入観が潜在的にあり、価値観の多様化が進化する情報化社会、技術革新社会について行けなくなってきた。人を生かす経営が重要であり、その為に人間の心を考え、安定、統一させ宗教的叡智を求めることが大切である。

2. 感謝する心を「五観の偈」に学ぶ

私達は、何も知らずに食事の前に「いただきます」と唱えている。これは禅の世界で、粥座 (朝食)、齋座 (昼食)、薬石 (夕食) のときに唱える「五観の偈 (食事五観文)」に起因する。

禅寺での食事は「行」であり、修行である。食事の前に唱える「五観の偈」とは、

- 1) 一つには功の多少を計り彼の来処を量る。

(今からいただく、この食物が食膳に運ばれるまでには、多くの人々の苦勞と天地の恵みがあったことを感謝いたします。)

- 2) 二つには己が徳行の全欠と付って供に応ず。

(自分の修行が、食事をいただくのにふさわしいか反省しつついただきます。)

- 3) 三つには瞋を防ぎ過貧等を離るるを宗とす。

(この食物に対し、選り好みや好き嫌い等の不平をいみません。)

- 4) 四つには正に良薬を事とするには形枯を療ぜんが為なり。

(この食物は自分の生命や身心をいやす良薬と考えさせていただきます。)

- 5) 五つには道業を成ぜんが為に當に此の食を受くべし。

(修業をして人間を完成させるために、この食事をいただきます。)

日常生活において、必要不可欠な食事に対し、感謝合掌の心を持つ「いただきます」、「ごちそうさま」を真剣に考えると「己れの力は一で、あとの九十九は囲りを取りまいて人々によって成りたっている」ことに、感謝の心を持つことを教えている。

3. 慈悲を説く仏教

仏教では「愛」は、迷いの恨源、苦の原因として否定的にみられている。

それは、自己中心的であると考えているから否定されるのである。たとえば、欲望から生じる「欲愛」、執着から生じる「渴愛」、憎しみから生じる「愛憎」、盲目から生じる「偏愛」、「盲愛」、「溺愛」等は、すべて本質的には自己愛であるからである。

「法句経」には、「愛より憂いが生じ、愛より怖れが生ず。愛を離れた人に憂いなし、なんど怖れあらんや」と書かれている。

そして、仏教の教えとしては「慈悲」を説いているのである。

著者：広島大学生物生産学部講師
近畿大学産業理工学部客員教授
日本禅画家協会名誉理事
中国少林書画院名誉教授
法号位 法印 禅画位 奥伝
青木伸雄
(野風生)
雅号 樹泉